

製造業

天野漆器 株式会社
http://www.amanoshikki.com/

創業は1892年。「高岡漆器」の伝統技術を活かしつつ、現代の生活にあった商品を提案する。そこから生まれた「ガラス螺鈿」がメディアで取り上げられ、国内のみならず、海外からの問い合わせが増加する。

▶CHALLENGE!
伝統工芸と現代の
ライフスタイルとの融合

▶進出先

 中国


■会社概要

- 所在地：富山県高岡市
- 業種：漆器製造業
- 資本金：1,000万円
- 創業：1892年 ●従業員数：6人

外国人にはすべてが新鮮な「漆器=japan」
世界の日常生活で使える商品を開発する

伝統工芸の技術を現代のライフスタイルに

Step-1
なぜ海外展開に至ったか？日常生活で使われなくなった
伝統工芸品に新しい命を吹き込む

1974年、「伝統的工芸品産業の振興に関する法律」が公布され、織物、和紙、文具、陶磁器など、古くから日常生活の中で使用されてきた品が「伝統工芸品」に指定された。高岡漆器もそのひとつだが、「生活様式の変化とともに、伝統工芸品が使われなくなったことは自明の理」と、天野隆久社長は語る。

「普段の生活で使われないということは、商品の売上も落ちるということです。漆器も同じです。ならば現代のライフスタイルにマッチした商品を作らなければならないと考えました。また、漆器は特に夏場の売上が振るわないので、夏場にも需要のある商品を開発しようとして試行錯誤を始めたのが5、6年前です」。

同じ頃、漆器と螺鈿(貝殻を薄く削り、器に張り付け漆で固定する加飾方法)を使った新しいブランド「DEN(鈿)」の商品開発に関わったデザイナーに「この製品は、海外展開を視野に販売しては」と

のアドバイスを受けた。そこでジェトロ富山の支援を受けてフランスで開催された「メゾン・エ・オブジェ」(欧州最大規模のインテリア・生活雑貨の見本市)に参加することになる。

Step-2
海外展開への進展伝統技術を活かした
「ガラス螺鈿」を開発

漆器は「メゾン・エ・オブジェ」において、「このような芸術品は初めて見た」と、驚きを持って迎えられた。一方、ヨーロッパで漆器を使うには気候の問題があることもわかった。それは日本と欧州との湿度の違いである。

「北陸地方は湿度が高い気候ですがパリは乾燥しています。漆器は日本の



国内外で注目される「DEN」

気候に合わせて発展した器なので、フランスでは器が乾燥してひび割れする可能性があります。気候や風土の違うところでも影響を受けにくい商品を開発する必要があるとわかりました」。



輸出を手がける天野真一常務取締役

欧州の乾燥にも対応できるよう陶器、金属など、違った素材に漆を施せないか試行錯誤を繰り返し、たどり着いたのがガラスだった。透明なガラスの底に、漆と螺鈿細工で金魚の絵柄を施して水を入れると、まるで金魚が泳いでいるように見えるのだ。

「ガラス螺鈿を展示会に出品すると、今までにないお客さまにも興味を持ってもらえました。ガラスと螺鈿の繊りなす意外性が人を惹き付けたんですね。それが、従来の漆器製品の売上にも結びついていったんです」。

Step-3
海外展開スタート富山空港から直行便で3時間50分
利便性と親しみのある台湾へ

ガラス螺鈿の開発に進展が見えた2010年。ジェトロ富山の支援を得て、「アジアキャラバン」に参加した。その際、日本公庫の



螺鈿を施した美しいガラス

海外展開・事業再編資金も利用し、準備にあたった。

「陶磁器は英語で“china”、漆器は“japan”と表現されることもあります。中国や台湾は、漆器にも馴染みがありますが、高岡漆器のような細かい技工を施したものは日本ならでは」。

また、漆器に施される絵柄も中国、台湾と通じるものがあります。たとえば、金魚の絵柄は日本でも浴衣の柄などに使われますが、台湾でも縁起の良い柄とのこと。同じアジア人としての親しみやすさもあり、台湾、上海、香港への輸出につながりました」。



海外への輸出は、代理店を通じて行っている。同社の輸出を手掛ける代理店は、伝統工芸品を取扱う日本企業であり、輸出に際し相談しやすいパートナーを得ることができた。

Step-4
今後のビジョン富山県ぐるみで伝統工芸品を海外へ
漆器は世界との「橋渡し」になる

富山県は県をあげて企業の海外展開に取組んでいる。ミラノ、ソウル、台湾、

ニューヨークと、海外の展示会への参加を富山県が積極的にサポートするなか、全国でもオンリーワンの商品である、同社のガラス螺鈿は引っ張りだこである。

また、富山空港からは、台湾への直行便がある。ここ数年、「台湾商談会」や「台湾文博会」、「台湾デザインEXPO」など、少なくとも年1回は大きなイベントに参加するようになった。



台湾文博会

「高岡漆器を認めてもらうということは、漆器にかかわる何人もの職人の仕事を褒めてもらえたということ。声がかかれればどこにでも輸出したいという気持ちはありますが、まずはこの伝統技術を世界の人に見てもらいたいんです。だから当社に来ていただいた方には、国籍を問わず皆さんに『世界と日本の橋渡し』の意味で、漆器の箸をお渡ししています」と天野社長。

展示会や海外メディアへの記事掲載、あるいは同社の英文のホームページを通じて、海外からの問い合わせは増えている。そこからニーズを読み取ることで、新たなチャレンジがスタートする。

Interview
我が社の“イズム”天野 隆久氏
天野漆器株式会社
代表取締役伝統工芸品に必要なのは変革と挑戦
日本の伝統技術を新たなモノづくりに活かす

日本の伝統工芸品にとって、今、必要なのは変革と挑戦です。「なでしこジャパン」の国民栄誉賞の記念品として注目された、熊野の化粧筆も書筆から発展したものです。食器や茶筆筒、文箱などに使われてきた漆器も、現代のライフスタイルにあったモノに変わる必要があります。また、日本人にとって工芸品は「馴染みのあるモノ」でも、海外の人にとっては「初めて見るモノ」なのです。漆器は美術品として博物館に納めるのではなく、世界の人が日常生活の中で使えるように、伝統技術を活かしたモノづくりに挑戦し、新しい商品を提案していきたいですね。